

楚簡研究の導き手

『竹簡学入門 楚簡冊を中心として』

宮島 和也



A5判 240頁
東方書店
[本体2400円+税]

陳偉著／湯淺邦弘監訳
草野友子・曹方向訳
竹簡学入門 楚簡冊を中心として

日本ではおそらく木簡の方が有名だが、紙が普及する以前の古代中国において竹簡は最も一般的な書写材料であった。近年、中国大陸では竹簡の発見が相次ぎ、中でも戦国時代の楚の領域から出土した竹簡―楚簡―が大きな注目を集めている。本書はその楚簡に関する基礎知識、発掘整理と解説作業、研究史や各資料の内容等について概説したものである。本書は陳偉『楚簡冊概論』（湖北教育出版社、二〇一二年）の抄訳であり、著者の陳偉氏は簡牘研究の世界的な拠点の一つである武漢大学で長らくその整理・研究に従事されている大家である。そして「監訳者あとがき」でも述べられているように、原著は陳偉氏の知見をふんだんに盛り込みつつ平易に書かれた、優れた楚簡の概説書である。

現在、古代中国の歴史・思想・言語など各分野の研究にとつ

て楚簡は必要不可欠な資料と言っても過言ではない。その一例として評者の関心に引きつけて言語研究、例えば上古音研究について言えば、楚簡には現在の我々からみれば「特殊」な通仮や形声文字がみられ、また「戦国時代の楚地」という時代と地域がほぼ特定されている資料であることから、音価の再構や仮説の検証に大きく貢献している（近年の上古音研究については古屋昭弘「上古音研究と戦国楚簡の形声文字」〔『中国語学』二五七号四―三三頁〕に詳しい）。

楚簡を用いてどの分野を研究するにしても、一次資料である楚簡を出来る限り「正確」に読み解くことは極めて重要である。しかし実際に楚簡を読んでいくには一定のトレーニングや言語学・歴史学・考古学等の関連する予備知識が必要となり、なかなかハードルが高い。そのため（評者自身がそうで

あったように）これから研究を始めようという場合、どこから手を付けたら良いのかという問題に突き当たるだろう。こうした要望に応える意味でも、原著が日本語に訳され出版された意義はとても大きいと評者は考える。以下、凡そ章ごとに本書の内容を紹介していきたい。

○書名及び全体について

まずは『竹簡学入門』という書名について触れておきたい。『竹簡学入門』という書名は原著のその直訳でないことは明らかであり、監訳者である湯浅邦弘氏の『竹簡学 中国古代思想の探究』（大阪大学出版会、二〇一四年）が念頭にあると思われる。果たして「敦煌学」のような一つの「学」ないしは領域として、竹簡あるいは楚簡の研究が確立する（している）のかどうかは異論も有るかもしれない。しかし上でも述べたように楚簡が極めて重要な資料であることは疑うべくもなく、「竹簡学」という言葉を用いた書名には、今後の研究の発展に対する、訳者の期待や意気込みが込められているのではないかと評者は推察する。

次に、全体に関わる事で原著と本書の大きな違いを挙げる。とすれば、より読者に親切な作りになっているということだろう。原著には写真や図が殆ど無いのだが、本書では竹簡や墓葬等の図版が大幅に加えられている。さらに各章の冒頭に

は訳者による概要が、また巻頭・巻末に詳しい用語解説や地図が付されている。これらは総じて本書の内容の理解を大きく助けるものであり、より入門書にふさわしい構成であると言える。

○「第一章 楚簡の基礎知識」（原著「緒論」）

この章では楚簡の定義に始まり、その種類や形態、楚簡で用いられる符号などについての基礎知識を紹介している。例えば楚簡には重文符号と呼ばれる、文字を二回読む事を示す符号がある（一本または二本の横線）。現在でも似たようなものが日本では「々」に姿を変え存在しているが、楚簡の重文符号はより複雑である。本書で言及されている例を挙げれば、郭店楚簡『五行』二〇—二二号簡「不聰不明不聖不_レ智。不_レ仁。不_レ安。不_レ樂。亡_レ德」は「不聰不明、不聖不智、不智不仁、不仁不安、不安不樂、不樂亡德」と読む。古代中国人には彼らなりの書写習慣・文化があり、その理解は楚簡を読むでいく上で重要である。

○「第二章 発見と研究」（原著第一章「発見と研究」）

本章前半ではこれまでに発見されている楚簡を湖南・湖北・河南の各省および骨董市場から購入したものに分けて紹介している。巻頭の「楚簡出土地点略地図」を参照しながら読み進めるのが良いだろう。

後半では楚簡研究の歴史を三期（一九五二～八〇年、一九八一～九七年、一九九八～現在）に分けて解説する。中でも楚簡研究の歴史において特に重要な意味を持つのは、一九九八年に刊行された「郭店楚簡」であろう。郭店楚簡には、伝世文献や既に発見されていた出土文献と対照できる文献が含まれ、楚文字の解読が飛躍的に進展した。大げさに言えば楚文字解読における「ロゼッタストーン」である。例えば本書九五～六頁で紹介されているように、楚文字の「罷」がどの語を表しているのかはそれまで意見が分かれていたのだが、郭店楚簡『五行』の「其義罷也」という箇所「罷」が、対応する『詩経・曹風・鳴鳩』や馬王堆帛書『五行』では「一」と書かれること等から、この字が「一」を表す文字であることはほぼ定説となった（ただしなぜ「一」を表せるのかについては現在でも議論がある）。

○「第三章 整理と解説」（原著第二章「整理与解説」）

本章では竹簡が出土した後の整理作業、文字の解読や竹簡の綴合について解説される。竹簡は多くの場合、泥にまみれた状態で出土し、本書の表現を借りれば「水に浸った麵」の様な状態であるため、洗浄・脱色・脱水などの処理を行わなければならぬ。また一つの竹簡が複数に分裂してしまっていたり、本来連続して書かれていた竹簡が分散していたりす

ることも多々あり、本来の姿を復元することが必要である。竹簡の復元は文字の解読や文意の理解に大きく影響するが、また反対に文字や文意が竹簡の復元の際の根拠ともなり、実際には不可分の関係にある。「第二節 文字の釈読と文意の解釈」以降ではかなり個別具体的な例に言及しているが、たつた一つの文字の解読・一本の竹簡の復元についても、多くの議論や研究者の努力の歴史があることが実感できるのではないだろうか。

○「第四章 出土文献の研究」（原著第八・九章「典籍」（上・下）

現在、楚簡で最も着目されているのは上で触れた郭店楚簡などに含まれる典籍（出土文献）である。郭店楚簡『老子』『緇衣』『清華簡』『金縢』など伝世文献と対照できる文献はものごころのこと、後世には伝わることのなかった文献も多く発見されている。本章ではその分類、編纂年代や地域性に関する考察、そしていくつかの文献についての概要が述べられる。

このような二千数百年の時を隔てて現代の我々の目前に出現した文献は、例えばどんなに立派な清朝の学者でも見ることの叶わなかったものである。それだけで感慨もひとしおという感がある。なお出土文献に関しては『出土文献と秦楚文化』（出土資料と漢字文化研究会編、既刊一〇号）、『中国研究集刊』（大阪大学中国哲学研究室編、既刊六二号）等に日本語で読むこ

とのできる訳注が数多く掲載されている。

以上、簡単ではあるが本書の内容に関して私見を交えつつ述べてきた。最後に、細かいことながら本書の中でどうしてもそのままでは理解しにくい部分があったため、指摘と補足をしておきたい。それは本書一四六頁、上博楚簡『呉命』三号簡の下に一号簡を綴合する事を解説した以下の部分である（傍線は評者による）。

問題は、三号簡の上端は欠損がなく、下端が残欠していることである。整理者の判断によると、残存部分には第二、第三の契口があり、つまり完整簡の上段に位置する。これは整理者が作成した『呉命』の全竹簡の図版の中に見える。このような状況下では、二つの残簡はいずれも残欠が比較的多い下段であり、綴合でできる可能性がない。

この箇所は難解である。まず「残存部分には第二、第三の契口があり、つまり完整簡の上段に位置する」については、最初に指摘しておかなければいけないのは原著にはその前に「一号簡両端残」とあり、この一文は一号簡についてであるということである。そして契口（竹簡を綴じる紐を掛ける切れ込み）は上から第一、第二と数えていくのだから、残存部分に第二・第三契口のみをもつ残簡が「つまり完整簡の上段に位置する」はずはない（『呉命』の契口は全部で三つ）。また実は上で引用した箇所の後に、一号簡について「整理者が第一契口と認定したものを第二契口と見なしたところ」とあり、さらなる混乱が生じる。

実は当該箇所の元となった陳偉氏の別の著書では指摘されているが（本書第三章注46に典拠、『呉命』の整理者は全体図

□ 新 刊 □

迎仏鳳儀の歌

—元の中国支配とチベット仏教—

乙坂智子 著

元のモンゴル人王侯たちは、なぜそれほどまでにチベット仏教を尊奉したのか。従来これについてはチベット地域掌握という側面からの議論が多くおこなわれてきた。しかし元は、中国域内においてもチベット仏教奉戴事業を盛大に展開している。では、これは対チベット政策から派生した単なる「潮仏」なのであろうか。本書はこの問題を、元の中国支配、なかでも漢民族社会に対する政治的圧力という視点から考察する。■12000円

六朝期における

仏教受容の研究

遠藤祐介 著

第一部「六朝期知識人の宗教的関心と仏教受容」、第二部「三教論争における諸問題」「結論」では新たな視点から六朝期における仏教受容の特徴を指摘する。■9074円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

版では一号簡を上部に配置している（即ち残存しているのは第一・第二契口という考え方）にもかかわらず、その整理者による注釈では一号簡に残された契口は第二・第三契口であると述べているのである。そのためここでも「残存部分には第二、第三の契口があり」「完整簡の上部に位置する」、さらに「整理者が第一契口と認定したもの」という一見矛盾した書き方になっていると考えられる。

次に「二つの残簡はいずれも残欠が比較的多い下段であり」については、その前の「三号簡の先端は欠損がなく」及び「完整簡の上部に位置する」と矛盾している。原文は「這兩支殘簡都殘缺比較多的下半部分」であり、改めて訳せば「この二つの残簡はどちらも比較的多くの下部を欠いている」となつて矛盾は解消されるだろう。

本書は抄訳ということで、原著の約半分の分量ではあるが（訳出されなかった部分については「訳者あとがき」を参照された）、凡そ楚簡を読む上で基本的なことは盛り込まれており、「竹簡学」の「入門」として十分な構成と言える。日本における楚簡研究の導き手として、本書が多くの読者の手に取られることを願う。

（みやじま・かずや 東京大学大学院博士課程）

日中国交正常化45周年記念講演会

日中国交正常化45周年を記念し、北京外国語大学の徐一平教授（中国日本語教育学会名誉会長）と大東文化大学の高橋弥守彦名誉教授による講演会を開催。

▼日時：7月8日（土） 14時～17時30分（13時30分受付開始）

▼会場：大東文化会館ホール（東京都板橋区徳丸2-4-21 1階／東武東上線東武練馬駅下車徒歩4分）

▼講演1（14時～15時30分）：『ナル表現』と『スル表現』から見た日本語と中国語 徐一平（北京外国語大学教授、中国日本語教育学会名誉会長）、コメンテーター：王学群（東洋大学教授、国際連語論学会会長）、陳淑梅（東京工科大学教授）、山口直人（大東文化大学教授）、司会：須田義治（大東文化大学教授、国際連語論学会副会長）

▼講演2（15時50分～17時20分）：『位置移動の動詞』上の用法とその日本語訳について 高橋弥守彦（大東文化大学名誉教授）、コメンテーター：佐藤富士雄（中央大学名誉教授）、劉勲寧（明海大学教授、大島吉郎（大東文化大学教授）、司会：統三義（東洋大学教授、日中対照言語学会会長）／総合司会：竹島毅（大東文化大学教授）

▼参加費：無料

▼定員：80名

▼お問合せ・お申込み先：氏名・所属・連絡先を記入の上、下記までEメールでお申込みください。大東文化大学有志の会事務局E-mail：0708@duan.jp